岸うつ波

壺井栄

岸うつ波

壺井　榮

光文社

著者紹介

一、壺井栄

一、一九〇〇年、香川県小豆島に生る。

一、主著に「暦」「妻の座」「右文覚え書」、および光文社発行の「岸うつ波」「母のない子と子のない母と」（文部大臣賞）「二十四の瞳」「柿の木のある家」（文部大臣賞）がある。

一、住所　東京都中野区鷺宮二ノ七八六

著者あて読後の感想をお寄せくだされば幸甚です。

昭和二十九年六月十日　初版発行
昭和二十九年七月十五日　再版発行

定価　二五〇円

岸うつ波

著者　壺井栄
発行者　神吉晴夫
印刷者　山元正宜
印刷所　三晃印刷株式会社
東京都文京区柳町二六

発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話大塚（94）一一〇〇―九
振替東京一一五三四七番

万一、落丁本、乱丁本がありましたら、本社でお取りかえいたします。

（美行製本）

目次

なぎさ……一
砂にかく……二八
海のこころ……四九
月夜の花……七八
山吹の里……九八
つぶて……一二二
草の葉……一四四
海図……一六〇
岸うつ波……一九八
あとがき……二二一

装

幀

森

田

元

子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

岸うつ波

なぎさ

1

がたん　と大きくゆれて汽車がとまつた。そのはずみに顔にかけていたハンカチーフがあごのあたりまでずれ落ち、それで目をさましたなぎさは、思わずあたりを見まわした。そばに母がいると思つたのだ。夢だつた。母がいるはずはなく、四人がけの座席は東京駅でのりこんだ時のままの顔ぶれだ。静岡か浜松あたりらしく、わさび漬を売る声が歌うように聞えてくる。

わッさァびづけェ　わッさァびづけェ……

その、何千何万回となくくりかえして叫んでいるうちに、すらすらに角がとれたような売り声を聞いていると、夢に現れた小豆島（しょうどじま）の母のことが思い出された。秋茄子の芥子漬などを作るのが得意だつた母は、わさび漬もまた好物で、東海道を旅する人にわざわざ銭をことづけて買つてきてもらつたりしたこともあつた。買つて帰れば喜ぶだろうとは思つたが、土産を買つて帰るほどの心のゆとりもなく郷里にむかつていることを思うと、またハンカチーフを顔にかけて、眠たげ

に装うほかなかつた。それまでだとて眠るために顔をかくしていたのではない。ともすれば涙ぐみそうになるのを人に見られまいためだつたのに、いつのまにか眠つていたらしい。苦しかつたり悲しかつたりするとき、眠りはなかなかよりつかないのに、たつたひとり傷心を抱いてのつた汽車の中でいつのまにか眠り、そのきゆうくつな座席のまどろみに現れたのが、さめているかぎり心を離れぬ夫のことではなく、日ごろ忘れがちの母であつたことに、なぎさは一種の安らぎを感じるとともに、思わず吐息のもれるような切なさをも感じないではいられなかつた。それはもう、ふたたび夫の家へは帰れぬかもしれないというような予感につながるものがあつたからだ。

とつてかえそうか……

気もちだけがはげしく逆行する。

こんな安定をうしなつた心を抱いて帰つてゆくのが、やはり故郷の小豆島でしかないということはつらかつたが、かといつてほかにどんな手だてがあろう。泣こうと笑おうと、だまつてそれを受け入れてくれるひろい愛情は、今のところ、おしめの世話をしてくれた人のほかにはあるまい。そう思つて恥をしのんで帰つてゆく故郷であり、母のふところである。

お母さん！

心の中でそう呼びかけただけで、ハンカチーフにかくれた目はもううるんでくる。しかも、母とは呼んでも、ほんとうは祖母なのだつた。だが、幼い時から母と呼びなれて育つたなぎさにと

つては、母としての感情で呼びかけられる人はこの祖母のほかにはなかつたのだ。幼かつた昔、寝床の中で乳房をまさぐつた母が、どうして途中から祖母だと思えよう。事実はそうであつたとしても、やつぱりそれは母である。自分を生んだ母が姉の加代だと知らされたのは五六歳ごろのことだつたろうか。やはり本当の兄だと思つていた義兄の忠雄が、つかみあいのけんかのとき、なぎさが、お母さーん　とそばにいもせぬ母を求めて叫ぶと、それを忠雄はせせら笑つて、

「ありやあばあさんじやないか。お前のお母さんは神戸のお加代じやど。お加代のててなし子ォ出ていけえ。」

　ててなし子がどういうことかさえわからずに、なぎさはただ、出てゆけといわれた悲しさで、泣きながら母をさがした。寺の上のみかん畑と見当をつけていつてみたがいなかつた。段々畑を横ぎつて、観音道のみかん畑へ方向をかえ、

「おかあ　さーん　おかあ　さーん。」

　と、おいおい泣きながら近づいてゆくと、みかん畑の繁みの下から母は走り出してきて、大声で呼んだ。手招きも一しよに、

「なぎよ、なぎ　なぎ、なにがどうしたんじや。早よ来い、早よこい。泣かんと早よこーい。」

　頭の手拭をはずして、よごれたなぎさの顔をふいてくれる母に、なぎさは新しい涙をながしながらうつたえた。

「兄やんが、なぎに、出て、いけェいうたァ。兄やんが、なぎのかみの毛、ひっぱって、出ていけくされ、いうたァ、あーん　あーん。」

母は新しい涙もふいてくれ、真顔でなぎさのうったえを聞き、なぎさのその引っぱられたというかみの毛を撫でながら、

「うん、そうか、そうか。それでなぎは出てきたんか。やれま、ほんに、かわいそげに、かわいそげに。」

大きな夏みかんの木の繁みの中で、なぎさの泣声に調子を合わせでもしているように、ちょつきん　ちょつきんと鳴っていた剪定鋏の音がとぎれたと思うと、大きな夏みかんが一つ、ころころとなぎさの方にころがってきた。

「ほーら、なぎ、お父つあんが泣きちんくれたぞ。」

母は大げさに喜び、それで泣きやんだなぎさであった。季節はずれの夏みかんはもう黄色さが薄れて軽かった。父も出てきて一ぷくつけるそばで、母のむいてくれた夏みかんは水気が少なく、袋の中の種は芽を出していた。

こんな記憶が今もなおなぎさの胸に消えないでいる。その父もやはりほんとうの父ではなく、祖母の二度目の夫であった。そこへ祖母は加代を連れ子して後妻にはいったのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

2

無口でやさしかつた父が一年ほど中気をやんでなくなつてからは、なぎさは母と二人で、納屋のあげの間に寝ていた。それまでいた納戸は、忠雄やその姉の年子が自分たちで使いたいと言い出したからだ。仏壇のある座敷はいつもあいているが、お客でもない限り、そこは主人のほかは使わない習慣であつた。めいめい部屋のある忠雄や年子が何故そんなことをいい出したのか、その時小学校の一年生であつたなぎさにも、おぼろげに感じることはできた。五つ年上の忠雄は、なぎさを目のかたきにして、ちよつとのきつかけにも悪たいをつく。

「なぎはほんまの兄妹じやないぞ。兄やんやこい言うてもらわん。お加代のててなし子じやないか。あた気色のわるい。」

そのときはもういなかつたにしろ、加代もやはり母の連れ子であつたことが、なぎさの小さな胸にむりやり押しつけられていた。ててなし子といい、連れ子といい、そこにどんな意味があるかはわからなくても、自分たちがこの家の者とは何のつながりもない、厄介ものであるということをさとらされるにはじゆうぶんであつた。なぜそんな厄介ものなのか、それはわからない。だが、学校へゆき出してみると、兄や姉たちが武内忠雄であり武内年子であるのに、なぎさだけは藤本なぎさであることから、忠雄のいうように、武内のほんとうの子でないことをうなずかずに

いられなかつた。しかし、同じ家に住みながらなぜ自分だけが藤本なのか。藤本であるから厄介ものなのか、それとも、てななし子なのが厄介ものなのかがわからなかつたのだ。昼間の働きでつかれはて、ねどこに入るとすぐ眠りにおちこもうとする母の胸をゆすぶつて、なぎさはしつこく聞いた。あげの間の三畳は母子二人の内しよ話にとつては重宝この上もない。

「お母さん、お母さん、どうしてなぎだけが、武内じやのうて、藤本なぎさよ?」

「さていなァ、役場の帖めんがそんなことになつとるさかいな。」

「そんなら役場の帖めん、なおしてもろていの。なぎ、藤本より、武内がすきじやもん。」

「そうかい。そんなら、いまに、そういうことに頼もうわい。さ、もう寝よう、寝よう。」

そういつて眠りこもうとする母をなぎさはまたもゆすぶり、

「お母さん、武内であつたら、てななし子とちがうん?」

「今じやつて、てななし子であるもんかいや。そのわけはな、もつと大けなつたら、わかることじや。さ、寝よう　寝よう。あしたにさしつかえる。」

「いや、さしつかえんど。なぎ、大けになるまで待てん。そのわけ聞かしておくれいの。」

「そういうても、ややこしいて、まだなぎにはわかるまいもん。ま、もちつと大けなつて、なぎが五学年ぐらいになつたら、聞かしてやる。さ、さ、ぐずぐずいわんと、寝た寝た。」

しかしなぎさは寝るどころでない。母のあごの下で小さな指を一本一本折りまげる。

「五学年か。二学年、三学年、四学年、五学年か。」
そして、もう呼吸の長くなりかかつている母をまたもゆすぶりおこし、
「お母さん、そんならどうして兄やんは、なぎのこと、ててなし子いうん？」
「ててなし子なもんか言うのに。なぎにはちやんとお父つあんがあつたじやないか。」
「死んだお父つあん？」
「そうそう。」
「んでも、兄やんはいつでも、あれはなぎのお父つあんじやない、いうもん。」
「性わるな兄やんじやなあ。お父つあんでない人に、なんでお父つあん言えるかい、なあ。」
「んでも、兄やん、いつじやつて、なぎのお母さんも、ほんまは加代姉ちやんじや言うのに。ほんなら、あれうそじやのう。」
「うそ　うそ。」
なぎさはそれでほつとする。なんとなくそれはやつぱりうそのような気がしたが、しかし、母が確信をもつた声で、うそうそと答えてくれると、安心した。その安心でほつとしているまに、母はもう本当にねむつてしまう。そうなるともう、いくらゆすぶつても生返事だけで、やがてはその返事さえも深い寝息にかわつてゆく。仕方なくなぎさは、その健康な母の寝息を子守唄にして眠りにつく。そしてまた、次の日に、くりかえす。

「お母さん、兄やんは、やつぱりなぎを、ててなし子、言うんで。」
「そうかい。困つた兄やんじや。そんならいつそのことほんまを言うてやろか。なぎのお父つあんは、九州におります言うて。」
「それ、ほんま？」
「ほんまとも。てて親の名は藤本直一といいます、言うて。それがなんで、ててなし子かい？いうて。」
「ほんま。ほんまになぎのお父つあん、その人かいの。」
「ほんまとも、そやさかい、なぎは藤本なぎさ、じやないか。」
なぎさの目は異様にかがやいた。その瞳をじつと見つめている母に、なぎさは無邪気に話しかける。
「ふーん。そうか。そんなら、どうしてお父つあんのこと、てて言うん。お手々みたようにのう。」
すると母は固くなぎさを胸の中に抱きしめ、
「さ、さ、晩に寝なんだら癇の虫がおきるぞ。寝よう、寝よう。こんなかわいい子が、めつたとあろうかい。」
そうして子守唄でも歌つてくれたら、なぎさにとつては天国であつた。母の子守唄はいつでも

「ねんねころいち」だ。なぎさの質問がしつこすぎたり、かげんが悪くて気むつかしかつたりする夜、「ねんねころいち」はうまく流れ出す。

ねんねころいち　てんまのいちよ
大根(だいこ)そろえて　ふねにつむ
ふねにつんだら　どこまではしる
木津やなんばの　はしのした
はしの下には　かもめがござる
かもめとりたや　なぎの日に

なぎさはいつのころからかこの歌のおしまいの、「なぎの日」が大気にいりで、それを自分のためにある子守唄だと、永い間思つていた。

3

武内の父の死後、家庭内での母の地位が次第に弱くなつていることは、小さなぎさにもなんとなく感じられていた。しかし母はいつも変らずただ黙々と働き、若い娘や息子たちにこまかく気をつかつた。それが、なぎさのいるためだということを、なぎさは少しずつ知るようになつた。あるとき、

「お母さん、年子姉ちやんは、なぎのことを、イソロ言うたァ。」

年子のいる前で告げると、母は年子に笑顔をむけて、

「居候に、ちがいないもんなあ、年ちやん。こらえて、つかあされよ。そのうち、加代とも相談して何とかしますさかい。」

口もとでは笑いながら、涙ぐんでいるのだ。それはなぎさの心に、深い感銘をあたえ、なぎさはだんだん、母に告げ口をしなくなつた。

二年生になつたなぎさは学校から帰ると、近所の家へ子守りにやらされた。子守りにゆけば晩の御飯だけは助かる。子守りにやらねばならぬほど武内の家が貧しいのでは無論ない。ただそれは母の年子への気がねからだつたらしい。亡くなつた父の内縁の妻であつた母にとつては、孫にあたるなぎさを大きな顔で家へ置けなく感じ出したのだ。加代が、神戸で女中奉公をしていた間は、なぎさの食費として月々いくらかでも送つてきていたのが、八百屋に嫁にいつて以来、ぱつたりそれがとだえ、そのために年子は急に意地悪くなつたのである。母と呼んで母の役目を全部任せきりでありながら、その母が生さぬ仲であるために信用することができず、まるでなぎさひとりが武内のしんしよを食いつぶしでもしそうに幼いなぎさにあたる。だれに似たのか、若いのに勘定高い年子は、女学校を出ると同時に家計をわが手ににぎつて、母の受持である果樹園に傭い入れる日傭とりの働きぶりまでかれこれいつた。あるとき、三時の一ぷくが長すぎるとか、早く切

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.